

# 間宮不二雄と『図書館雑誌』、『<sup>としょかん</sup>図書館研究』

志保田 務

## 序

間宮不二雄（1890－1970）は青年図書館員聯盟の実質的主宰者であり、同聯盟編『日本目録規則』（Nippon Catalog Rules, のち Nippon Cataloging Rules；以下、NCR と略）、『日本十進分類法』（Nippon Decimal Classification；以下、NDC と略）、『日本件名標目表』（後、『基本件名標目表』）など、日本の図書館における整理三大ツールの成立を主導した。日本の図書館界に対する間宮不二雄の貢献は偉大で、その功績は伝記、評伝などに記録されており、彼に対する検討を改めて行う必要はないとされるかも知れない。

他方、間宮不二雄はローマ字運動を始め広い活動領域を有しており、図書館界における彼への評価には微妙な揺れがある。日本の図書館界における彼の基本的な立場を、図書館用品の商人、出版社・間宮商店の代表（合資会社、無限責任社員）、図書館員のパトロンと捉えるむきがある。そこで通常、間宮不二雄は「外から図書館を愛した人」と表現される<sup>1)</sup>。たしかに間宮不二雄には図書館員の経験がなく、司書講習会の講師の経歴はあるものの、図書館学の大学正規教員の履歴はない。また、多数の図書館関係の論著を持っているが、それらがいわゆる図書館学研究書、研究論文であるとする評は見つ

---

1) もり・きよし「外から図書館を愛した人 間宮不二雄」『図書館を育てた人々；日本編Ⅰ』日本図書館協会 1983.6 p.132－138

キーワード：間宮不二雄、『図書館雑誌』、『図書館研究』、図書館学、図書館技術

け難い。こうした事実は、間宮不二雄が図書館学者と位置づけられない原因であるかもしれない。

しかし私は、間宮不二雄が日本の図書館史内、または図書館学史内において再評価されるべきものと考えて、本稿を提示する。図書館行政の権力者たちには見えにくい、図書館員における研究活動、研究環境の改善という、図書館員の側つまり「内」から「図書館を愛した人」だったと捉えようとするものである。

本研究は間宮不二雄における図書館学的意識の高さを把握しようとするものである。第一に、間宮不二雄が請われて『図書館雑誌』、(日本図書館協会〈以下、引用文献で使用されている以外は、JLA と略〉の機関誌 1907年創刊)の「出版」、「編集」に携わり(大正末年から昭和期初頭:1926-1928)、同誌の誌面改革を実行した事実・内容を確認する。

第二に、間宮不二雄は前記『図書館雑誌』に関する任を1928年5月に解かれるが、同年1月にはかつて彼自身が発刊し『図書館雑誌』の任に就くために休刊していた『<sup>としょかん</sup>圖』の復刊を図り、青年図書館員聯盟を主導して、研究の質が遥かに高い『<sup>としょかん</sup>圖研究』を発刊した。このことに焦点をおいて、間宮不二雄を評価する。

第三に、第2次世界大戦敗勢のなかで『圖研究』を『図書館雑誌』に吸収せしめようとした国政関係からの誘いに抗し、『圖研究』の廃刊を決行した間宮不二雄における図書館研究誌に関する矜持、図書館学的水準維持の志向、権力に迎合しない意識を確認する。このことによって間宮不二雄が、戦時下構造に入ることを拒否した事実を把握、評価する。

第四に、間宮不二雄が主宰する青年図書館員聯盟と、JLAの間の「主記入論争」を指導したことである。同時に間宮不二雄が、図書館業務における「整理の三大規矩(ツール)」を策定し日本における図書館学の基盤を築いたことを確認する。

間宮不二雄はこのように広範な面で図書館研究の基点を築いたが、そうした彼の資質が学問的に最も顕著に現されたのが、『図書館雑誌』、『圖研究』

の編輯，誌面構成であると判断し，これら二点を中心に彼の業績について考  
及する。

## 1 間宮不二雄における『圖書館雜誌』の「編輯」，「発行」，「印刷」

間宮不二雄は東京本郷の生まれ育ちであるが，間宮商店（1921年開業）の  
本店を大阪市（最初は北区，のち南区）に置いたことから，彼の図書館関係  
活動は関西を拠点に行われ，間宮不二雄は東京（JLA，帝國圖書館などの  
所在する土地）と対峙する位置にあった。間宮不二雄は『圖書館雜誌』に対  
抗して，1926（大正15）年10月独力で『圖』という雑誌の第1巻1号を創刊  
した。11月と12月，1月と2月，7月と8月を合併号として，年9号の発行  
予定であった<sup>2)</sup>。ところが『圖書館雜誌』に携わることとなり『圖』誌を1  
号だけで打ち切り廃刊した。間宮不二雄は述懐している<sup>3)</sup>。

私は自分の事業が追々その緒に就いたので，予て抱懷していた自由な  
研究と意見の発表機関を設けたい考えから，大正十五年夏に『圖』誌の  
第一巻第一号を発行した。私の計画は月刊誌で門戸を広く一般に開放し，  
館界の進展に寄与したいと思ったのであった。（中略）当時の協會誌に  
発表される記事が多くはヴェテランの隨筆的のもので，新進図書館員の  
イキの良い研究論文等は余り見当らなかった。（中略）大正十五年初秋  
今井氏から電話で東京から理事の一人坪谷善四郎氏が来阪して私に面会  
したいから淀川の某料亭に来て貰えまいかとのことであった。さてはと  
予感がした。会った結果は協會誌編集委嘱の件であった。私としては非  
常に当惑したのであったがわが図書館事業のため大乘的見地から『圖』  
誌は一号で廃刊することにして大正十五年十一月（第八六号）から引受  
けることにした。

2) 圖誌編輯部「『圖』誌発行ニ就イテ」『圖』1（1）1926.10 p.2

3) 間宮不二雄『図書館と人生』間宮不二雄古希記念会 1961.6 p.107-108：  
「一編集者としての思い出」

JLA は書肆丸善から、『図書館雑誌』の創刊号以来出版費支援を受けていた<sup>4)</sup>。1923年9月の関東大震災で社屋が崩壊し、丸善はこの費用を出すことができなくなった。1926年秋 JLA は理事長制を採用し初代理事長に大阪府立図書館長・今井貫一を選出した。身近か（大阪）に手駒を持たなかった今井貫一は、当然のように間宮不二雄を『図書館雑誌』の編輯，発行者として選んだと鈴木賢祐は述懐する<sup>5)</sup>。JLA 理事会は今井貫一の監督下に間宮不二雄へ編集実務，印刷発行を委嘱した。

間宮不二雄も，最初は理事会の指示を了解したかのような文章を残しているが<sup>6)</sup>，同誌次号奥付の編輯，出版関係の表示では次のように変化している。

『図書館雑誌』1927（昭和2）年1月号（通号88号）奥付は，「編輯兼発行兼印刷人 間宮不二雄」，「発行所 間宮商店」と記した。これらとは完全に離れて「日本図書館協會」の名と所在地等の表示がある。こうした奥付上の表現，割り付けを，間宮不二雄が実行したことは疑いない。

間宮不二雄は自身を「編輯・発行・印刷者」とした。発行所は「間宮商店」とした。これは物理的な出版工房の意味かも分からないが，本来の発行所ともいえる「日本図書館協會」の名は，これらとは外れ欄外に記された。

この間の『図書館雑誌』の編集，発行に関しては間宮不二雄と JLA 理事会の間に理解の相違があったようである。そのことは，間宮不二雄が同誌の任を辞す際に「編輯者変更について」という読者向けの通知で<sup>7)</sup>，JLA 理事会が「今井理事長編輯監督の下にその印刷，発行を大阪の間宮商店に委託してあった」（下線；筆者）としたところに管見される。また1943年12月『『図書館雑誌』沿革概史』を著した小谷誠一は<sup>8)</sup>，同誌1926年11月～1928年5月までの時期を「間宮商店時代」と表した。ただし小谷誠一は，間宮不二雄が

4) 小谷誠一『『図書館雑誌』沿革概史』『図書館雑誌』35（12）1943.12 p.31

5) 鈴木賢祐「囲事業界の志士 間宮不二雄氏のこと」『図書館雑誌』22（5）1928. 5 p.115-116

6) 間宮不二雄「〈日本図書館協會編纂 図書館雑誌〉の発行を引き受けるに就いて『園』一時休刊の申訳」『図書館雑誌』84, 1926.11

7) 「編輯者変更について」『図書館雑誌』22（6）1928. 5 p.140

8) 小谷誠一：前掲 p.35

同誌の「編輯者」だったと認めている。同論文内の時代区分上、商店名が見出しとなったのはこの期だけである。また「間宮商店時代」に続く時代を「太田委員長時代」としている。委員長名を見出しとした時代区分はこれだけである。この二つの期に関する名称は他期のそれとは異なる趣きのものとなっている。この点を通じて間宮不二雄の起用およびその解任がJLAにおける異常事態であったことがわかる。

間宮不二雄のこの『圖書館雜誌』への関与の核心は「編輯」にあった<sup>9)</sup>。

それゆえ間宮不二雄はこの仕事についてすぐ誌面改良案を出し<sup>10)</sup>、実行した。

第一 全部横組み仮名は平かなとする事<sup>11)</sup>。

第二 外国語は（中略）原字のまま掲記すること。

第三 数字は（中略）アラビア数字を使用のこと。

第四 「これまでは通号がもちいられているが1927年1月号より」21年（巻にあたる）1号というようにする。

第五 1年を通じての通頁を用いる事。

このうち「横組み」以外の点は実行された。平仮名の採用は、間宮不二雄が既に使用しておりその後も主用した片仮名とは異なる。『圖書館雜誌』の伝統に従ったのである。このような改革は、機関誌から、専門誌、学会誌への発展を望んだゆえであった。誌面は格段に充実した。鈴木賢祐は次のように記す。

内容体裁共に一個の専門雑誌としてふさわしいものとなった。斯界の諸問題に関する縦論横議は鬱然として勃興した。新人は次から次へと紹介さ

9) 間宮不二雄「本誌の編輯を辞するに臨みて」『圖書館雜誌』22（5）1928. 5 p.104

10) 間宮不二雄「〈日本圖書館協會編纂 圖書館雜誌〉の発行を引き受けるに就いて『圖』一時休刊の申訳」『圖書館雜誌』84, 1926. 11

11) 間宮不二雄は後（1940年代ごろまで）常用した。「片仮名」に当時は固執していない。平仮名を使用して下記の辞書をも編纂している。

間宮不二雄編纂『欧和对訳圖書館辞典』文友堂 1925.10

れた。寄稿数の激増は増頁に次ぐに増頁をしても追いつかない有様であった。今試みに本誌が大正13年初めて4季刊行より月刊となりたる後の頁数を調べる<sup>12)</sup>。(下線；筆者)

大正13〔1924〕年

本誌172頁（広告共）別に附録36，別刷写真1（本誌平均1ヵ月14頁強）

大正14〔1925〕年

本誌192頁（広告共）別に附録52，別刷写真4，表1（本誌平均1ヵ月16頁）

大正15〔1926〕年（但し1月より10月まで）

本誌188頁（広告共）別に附録21，別刷写真2（本誌平均1ヵ月18頁強）  
〔10ヵ月〕

以上に対し間宮不二雄編輯の，大正15年11月，12月は計52頁。外に別刷写真1枚（本誌平均1冊平均22頁）となった。

間宮不二雄が丸々拘わった1年は下記のようにであった。

昭和2〔1927〕年

本誌387頁（告共）別に附録22，別刷写真2，表1（本誌平均1ヵ月31頁強）

以上を表（1）として下記にまとめた。

表（1）『圖書館雑誌』のページ数：間宮不二雄の編集時期を主対象に

年 月	本 誌	付録	別刷写真	表	月平均（本文）
大正13/ 1～12	172頁（以下広告共）	36	1		14頁強
大正14/ 1～12	192頁	52	4	1	16頁
大正15/ 1～10	188頁	21	2		18頁強
11～12	52頁（間宮編集）		1		22頁
昭和2 / 1～12	387頁（間宮編集）	22	2	1	31頁強

鈴木は次のように続けた。

12) 鈴木賢祐：前掲

果たして本誌はその面目を一新した。

この間宮不二雄担当の時期「主たる執筆者は、田中敬、竹林熊彦、鈴木賢祐、加藤宗厚、林靖一、伊木武雄等の諸氏」であった<sup>13)</sup>。

間宮不二雄自身次のように振り返っている<sup>14)</sup>。

従来の創刊号からの追番号各面独立頁付を改め一年一卷として貫通頁を附し索引編纂の便宜に供すること、横組とすること等であったが、会員の意見を徴した結果やはり組方は縦組で、「巻」の代りに「年」とすることになり、昭和二年は創刊後第二一年となるので第二一年一号とした。また月刊断行と同時に第三種郵便物の認可も受けられたのである。会員からは続々寄稿があり、協會本部と予め協定した頁数は増大するばかりで、当時としては相当な効果を挙げることが出来た。

以上の点は以後にも継続した。間宮は年間索引（論文件名索引と著者名索引）を設けた。この索引を間宮以後の戦中の編者は維持しなかった。

## 2 間宮不二雄、『圖書館雜誌』任務からの解任

間宮不二雄は1928年5月、『圖書館雜誌』関係の任務から解かれる。1年半ばかりの担当であった。この解任は外形的には、JLA 理事長が今井貫一から東京（松本喜一帝國圖書館長）に移ったためとされる<sup>15)</sup>。これらの事情についてはさらに検討を要するであろう。

間宮不二雄の解任について考察する前に、任命時の事情を再度確認しておく必要がある。今井貫一を初代理事長に選出した1926年11月の JLA 総会は、

13) 小谷誠一：前掲 p.35

14) 間宮不二雄『図書館と人生』間宮不二雄古希記念会 1961. 6 p.107-108：「一編集者としての思い出」

15) 「編輯者変更について」『圖書館雜誌』22（6）1928. 5 p.140

①「理事中より一名を選出して協會事業の統括をなす事」, ②「理事長は本部所在地居住者に限定せる事」, ③「必要により事務員を囑託し得る事」を決定した<sup>16)</sup>。間宮不二雄への『圖書館雜誌』発行等の委嘱は上記③に基づいて、理事長・今井貫一大阪府立圖書館長の決定で行われていた。雑誌の編輯が理事長の膝元で行われるべきとの規定は上記決定にはないが、機関誌の編輯はJLAの中心事業であった。したがって間宮不二雄の解任は今井貫一大阪府立圖書館長のJLA理事長辞任と関係している。だが、元来、大阪の今井貫一を理事長としたこと自体が②の決定と矛盾する。JLAの本部は東京にあったからである。ただ、本質的に、JLA本部が東京に在るべき理由はない。

一連のことを再整理する必要がある。1923年秋の関東大震災で東京が大打撃を受け1926年ごろJLAは人手、経費に不如意をきたした。その緊急避難として、大阪側に理事長職を託し、編輯業務とその為の人手、出費を依頼した。「大阪」は、今日以上に西日本の中心であり、東京の危難を助ける役割が期待された。そして初代理事長を引き受けた今井貫一には、『圖書館雜誌』を発行する資力と、それを編輯するための識見、力量を間宮不二雄に求めた。大震災から約4年半後1928年春、体制を整えたJLAは雑誌の編集権を東京側に取り戻す意志を固め資金を用意した。

ところで大震災後の日本の各種図書館界においては協議会の設立が続いた。そうしたなか1927年12月に、間宮不二雄の膝元で青年図書館員聯盟が設立された。間宮不二雄はその組織の、中心・書記長となっていた。同聯盟は、間宮不二雄が『圖書館雜誌』の編輯から降りた1928年5月直前の1月に機関誌『圀研究』を創刊している。これらの図書館界改革志向が、東京の図書館権力、JLAなどに危機感を与えたと想定する。JLAは部会として「公共圖書館部」のみを有していたに過ぎない。

当時JLAには「目録法統一」の主張（田中敬）、文部大臣による「国民

---

16) 樋口龍太郎稿『日本図書館協会五十年史』初版 日本図書館協会 1989. 3 p.82



思想善導」の諮問等を基に中央図書館制への驀進があり、図書館令改定の時期を控えていた。時代の状況下、帝國圖書館の増築起工（同年6月）を前に帝國圖書館長・松本喜一がJLA 2代目理事長に選出された。間宮不二雄の更迭にはこうした背景があり、『圖書館雜誌』を旧権力が手元に引きよせようとしたと考察される。間宮不二雄は次のように表現した<sup>17)</sup>。

本部に於ても再び雑誌編集の準備が整ふことになりましたので、是迄不肖私如きものが協會の生命である本誌の編輯に従事し來たったことは全く一時の権道であって、本誌發展の上に於ても、協會本来の立場からいっても、一日も早く正道に立還るべきであると信じ、私はこの機会に於て本誌編輯の任を辞することにいたしました。

間宮不二雄のこの一文に見るようにJLAの本部は、東京にあるようである。間宮不二雄に編輯が委ねられたことは「一時の権道」、邪道という。この更迭を間宮は「辞任」と表している。だが昭和3（1928）年6月号『圖書館雜誌』奥付隣り「編輯者変更について」JLA〔太田為三郎〕は次のように切り捨てた<sup>18)</sup>。

本誌の編輯内容が多少なりとも或る部分、或る方面に偏するがごときは、断じて避けなければならぬことであって…（中略）本誌は一昨年十一月号以降、今井理事長編輯監督の下にその印刷、発行を大阪間宮商店に委託してあったが、今回役員改選の結果…（以下略）。

ここには、前編者、発行者に対する感謝もねぎらいもない。むしろ権力を笠に着た傲慢な身勝手さがあり、学問レベルの雑誌としての品位を疑わせる。

間宮不二雄は辞意を示した最終編輯号の『圖書館雜誌』第22年5号に鈴木

17) 間宮不二雄「本誌の編輯を辞するに臨みて」（前掲）

18) 「編輯者変更について」『圖書館雜誌』22（6）1928.6 p.140

賢祐による「圖書業界の志士 間宮不二雄氏のこと」を採録した。一部引用する<sup>19)</sup>。

(前略) わが国の図書館事業への氏の寄与も、その将来をこそ剋目して待つべきであって今はこれを清算すべき時期ではない。(中略) 今や本誌が氏の手を離れようとしてゐる時に方り、本誌上で過去1年7箇月に亘る氏の労を顧み謝する者が本協会員の中に一人ぐらゐあってもいい筈だと信ずる。(中略)

本誌が右の短期間にわが図書館界に残した大いなる足跡は永久に消えないであらう。しかしながら臚を得て蜀を望む心からすればわれも本誌に対してなほいくつもの希望をもち、本誌が間宮氏の手にある限り、それらも着々実現されるであらうことを信じて疑はなかった。残念なことに今や本誌は氏の手を離れようとしてゐる。(後略)

この一文の後に、間宮不二雄は次のような言い訳を付言した<sup>20)</sup>。

右の一文を本紙に掲載することは、編輯者たる私の立場としては誠におもはゆいことで、甚だ恐縮の至りではありますが、さりとてむげに之をお断りするのも鈴木氏に対して失礼なことでありますので、その過褒の甚だ当たらざることは萬々承知しながら之を掲載することに致しました。会員各位が私のこの苦衷を諒とせられん事を偏に願ひする次第であります。

間宮不二雄

こうした間宮不二雄の判断・断行がJLA重鎮から嫌われた原因があったであろう。しかし間宮不二雄は、30歳代に『図書館雑誌』を僅か一人で編輯、発行し、誌面を画期的に改善した日本図書館学史上唯一の人物である。

19) 鈴木賢祐(前掲) p.131

20) 『図書館雑誌』22(5)1928.5 p.116

### 3 間宮不二雄における図書館関係事の標準化志向の沿革

1921年、間宮不二雄は図書館用輸入・販売の間宮商店を開店の前後から図書館業務の標準化を志していた。この販売のなかで間宮不二雄はマニュアルを提供し若い図書館員に研究を勧めていた。1924年4月から出した『圖書館研究』というブックレット体のシリーズがそれである。最初は50銭（当時）で、のち1円に、次に2円となり、1928年にシリーズが終了する。間宮不二雄編、2輯全12巻である。下記のものがある。

第1輯 第2巻 見出カードノ話；附 分類法 1924年7月

第1輯 号外 今井貫一著 デュウィ<sup>マ</sup>十分<sup>マ</sup>分類第三要目表 1925年11月  
1928年5月、約1年半で『圖書館雜誌』担当の任から解かれたのちも、間宮不二雄の図書館研究に関する熱意はまったく衰えを見せることがなかった。青年図書館員聯盟のもとに、『圖書研究』、NCR など「整理の三大ツール」を発行し、『圖書館研究叢書』を刊行した。間宮不二雄自身下記を著している。

第8輯 王雲五著 漢字ノ四隅番号化檢字法 間宮不二雄訳 1930.2

第10輯 Dewey M. Dewey 十進分類法導言 間宮不二雄訳 1930.12

これ以前に間宮不二雄は『欧和対訳圖書館辭典』（文友堂 1925.10）を編纂している。このように日本の図書館研究に果たした彼の功績は偉大と言えるよう。

### 4 青年図書館員聯盟の設立、『圖書研究』の創刊

1927年12月、青年図書館員聯盟を設立、間宮不二雄はその書記長に就任した。翌年1月、青年図書館員聯盟が『圖書研究』を創刊し、間宮不二雄はその発行責任者となった。

青年図書館員聯盟の「創立」宣言には同聯盟の綱領が記されている<sup>21)</sup>。

一 図書館員教養ノ向上

21) 「青年図書館員聯盟 宣言」『圖書研究』1（1）1928.1 p.100-101

## 一 図書館管理法準則ノ確立

## 一 図書館設立経営ノ指導

これはJLAとどう関係するのであろうか。「宣言」本文を参考に理解すべきであろう。本文には次のようにある。

挙国的単一団体ノ結成ヲ促進シ、諸種ノ図書館運動組織化ニヨッテ全般的図書館事業ノ発達ト、図書館員ノ共同利益ノ増進トヲ着期セントスル。

これによっても「挙国的単一団体」を目指すという意味が明らかではない。本心はこれとは異なるところにあるように思われる。同宣言の別の文節を見る。

中世的ナ旧套ヲ墨守シテ足レリトスルモノ、先進国ノ鵜呑みの模範ニ康ンズルモノノ覚醒ヲ促シモッテ斯界ノ刷新廓清ヲ期セントスル。

「青年図書館員聯盟」は37歳の間宮不二雄を中心とした青年の集団であった。この聯盟が、帝國図書館長・松本喜一を理事長に戴くJLAという権力の下に参集し「単一図書館聯盟結成」を目指したと考えることは困難である。青年図書館員聯盟の主眼は「綱領」中の教養ノ向上、管理法準則ノ確立にあったと言ふことができよう<sup>22)</sup>。

同号には米国への遊学の経験（1915年）を活かした図書館用品の輸入販売、図書館分野洋書の購入業務を土台とした、間宮不二雄による和訳、中国図書館分野の書籍の翻訳が目立っている。間宮不二雄と青年図書館員聯盟は多面において図書館学会の役割を果たした。同聯盟の「書記長」間宮不二雄は、実質この学会の「会長」の働きをしていたと考える。なお『團研究』の誌面

22)『図書館用語辞典』角川書店 1982.10 p.447：項目「團研究」

構成に関しては充実した内容の論文、索引等に対する評価が高い<sup>22)</sup>。

## 5 『日本目録規則』の策定から『圖研究』の廃刊：まとめを兼ねて

JLA と青年圖書館員聯盟の対立関係が明白になるのは、「主記入論争」以後である。

「主記入論争」<sup>23)</sup> は JLA が策定・発表（1932年4月）した「和漢書目録法」<sup>24)</sup> を巡る議論である。「和漢書目録法」は、著者主記入と書名主記入を併せ是認していた。間宮不二雄が率いる青年圖書館員聯盟の会員たちは JLA の目録規則（案）「和漢書目録法」への批判を展開した<sup>25)</sup>。同聯盟は西洋流の目録規則に倣い、著者主記入方式で和洋書に共通に適用される目録規則の策定に励んでいたのである<sup>26)</sup>。彼らが目指したものは、国際的な標準に立つ日本の目録規則の策定であった。

間宮不二雄は後数十年にわたり青年圖書館員聯盟及びその機関誌『圖研究』を主導した。だが第2次世界大戦の激化に伴い『圖研究』が『圖書館雜誌』に吸収される事態に至った。間宮不二雄は『圖研究』の廃刊を決意した（1943年）。研究誌としての姿勢をここに見る。同時に JLA 等が採った文部省、帝國圖書館を頂点とするピラミッド型支配への抵抗と考察される。ただし、間宮不二雄は、関東大震災直後『圖書館雜誌』の窮状を救ってその編輯、発行を担当し、戦後においては米国図書館使節団の勧告<sup>27)</sup>の下に NCR、NDC の編纂・改訂を JLA の手に委ねるなど JLA の活動に貢献している。間宮不二雄は学問、研究に貢献するかぎりにおいて、図書館関係の協会にも充分の協力をしたのである。

ニューヨーク遊学時代（1915年）に出会った間宮の思い出として大内兵衛が記すように、間宮不二雄の言動の根底には、図書館に関する「研究」への

23) 『図書館用語辞典』角川書店（前掲）p.238：項目「主記入論争」

24) 「和漢書目録法」『圖書館雜誌』26（4）1932.4 p.103-112

25) 「主記入論争ヲ終結シタ」『圖研究』5（3）1932.10 p.436-437

26) 青年圖書館員聯盟編『日本目録規則 NCR1942』間宮商店 1943.3 p.5-6

27) 国立国会図書館編刊『国立国会図書館三十年史』p.342

強烈な意識があった<sup>28)</sup>。『図書館雑誌』担当（1926年末）前後の時期に、彼が出版した『叢書 図書館研究』、『図書館研究叢書』等、も「研究」に留意したものである。彼はそうした蓄積を『図書館雑誌』誌面の編輯改善に投入した。しかしそうした彼の営為は体制側に「偏向」として退けられた<sup>29)</sup>。

本稿は、日本図書館界の「外」にあるとされた間宮不二雄について<sup>30)</sup>、『図書館雑誌』、『図研究』の誌面構成等の卓抜さを軸に、「研究者」と評価し、彼が日本図書館学研究の基盤確立の中心的位置にあった事実を考察した。

（しほた・つとむ／経営学部教授／2005年1月7日受理）

---

28) 前田哲人編刊『間宮不二雄の印象』1964.6 p.34-35：大内兵衛 「間宮君との出会い」

29) 輯者変更について『図書館雑誌』（前掲）

30) もり・きよし（前掲）

Study of Fujio Mamiya, his  
“Toshokan Zasshi, Library Journal” and  
“Toshokan Kenkyu, Library Research”

SHIHOTA Tsutomu

Fujio Mamiya (1890 – 1970) was a substantial presider of Young Librarians' League, and under his guidance were established three major tools applied for arrangement in the library of Japan ; Nippon Catalog Rules (hereafter, NCR), Nippon Decimal Classification (hereafter, NDC), and Nippon Subject Headings (in the later, 'Basic Subject Headings'). Some might assume the evaluation for him does not need to be reasserted because his contribution to the library world in Japan was distinguished and his achievements are recorded in his biography and the critical biography, etc.

On the other hand, Fujio Mamiya was involved in a wide range of areas such as Roman alphabet movement, and the evaluation for him in the library world is yet to be confirmed. He is sometimes regarded as a library articles merchant, representative of a publisher, Mamiya Store (joint-stock company with unlimited liability) or a patron of library members. Therefore, Fujio Mamlya is usually described as “a person who loved libraries as a supporter of them”.

However, I am presenting this text believing it is essential that Fujio Mamiya be revaluated in the history of Japanese libraries and library studies. It is an attempt to evaluate him as “a person who loved libraries from the standpoint of a librarian”, who contributed himself to the improvement of the “study activities” and “study environment” of librarians, which aspects were hard to recognize for those in power of the library administration. He didn't certainly have the experience as a library

member nor was he a regular professor of the library study in any university, though he lectured at several librarian seminars. He also has numerous library-related research books, but they are not considered to be “library research papers” nor “research papers”. The above stated facts are parts of the reasons for him not being evaluated as a library scholar.

In this text, Fujio Mamiya will be revaluated as a person with high standard of awareness of Library study.

Firstly, the fact shall be confirmed that upon request, he was involved, between 1926 and 1928, in the “Publication” and “Editing” of “Toshokan Zasshi, Library Journal”, which was first published in 1907 by Japan Library Association (hereafter, JLA), and that he reformed the journal.

Secondarily, he will be evaluated as a publisher of “Toshokan Kenkyu, Library Research”, in January 1928, initiating the Young Librarians’ League, the research quality of which is far higher than that of ‘Toshokan, Library’, which was initially published by him and was suspended for his work with ‘Toshokan Zasshi, Library Journal, after he left the assignment with ‘Toshokan Kenkyu, Library Research’ in May, 1928.

Thirdly, the fact that he refused to be involved in the post-war structure and he will be evaluated as a person with pride in library research journal, with determination to maintain the library research standard and with conscience not to compromise with power, based on the fact that he ceased to publish ‘Toshokan Kenkyu, Library Research’, protesting against the invitation from the national administration who tried to absorb ‘Toshokan Kenkyu, Library Research’ into ‘Toshokan Zasshi, Library journal’ in the downing phase of World War II.

Fourthly, the fact that he guided “Main entry controversy” between the Young Librarians’ League, presided by Fujio Mamiya, and JLA, and at the same time laid the foundation of library study in Japan by establishing “Three major tools of the arrangement” in the technical processing services in library.

In this text his achievement will be revaluated by studying mainly his ‘Toshokan Zasshi, Library Journal’ and ‘Toshokan Kenkyu, Library Research’, for his academic talent was most remarkable in compiling and



making them, though he laid the foundation of library study in many aspects as stated above in Japan.